

門 4
3764
卷 2

早稲田大学図書館
25.11.10
蔵 本

唐太日記 卷之下



君氣志郎 松浦弘 評注

廿五日 昨夜より引續きたる風雨にて船渡り遅延し
あり早朝より起出旅装し甲斐のれし糧食を交へらむと
然るれどもかく定まり日を送るやあやま心苦しこれより妻人
共船を出されし途ありと朝に彼へ一舟のこゝろを根と入
道云来りて粥を焚て食ふと一と少く苦味あれども巻舟乃
如くして風味雅ありのち少く此西より白鳥と云う揮を
或るより持来りて玄米と入道本紙割りて精けきり余も是を

唐太日記 卷之下

助けく揚きり總て妻家の不自由あること言傳は堪へとたは
あんとはつゝく廢物なしと試はし口嗽んとはつゝ不鹽あり
倍て余ら指を倒さるゝ一燈の方く水を入是とてと燈は
ちと燃きしをり中と火轉とてつれをり一割是石の凹きり
火を入きしなり

注此石はルウタカの水源はつるを出入等船澳より上りは耐
割り雨り重箱旁へ配分せることあり一雨り運上屋近所の出
人等ハ随分火轉位ハつるをりはれとも此石を用ひるゝ此燈の
風をりたり實は此石を亦覆蔽とて是のり
足輕想を餘り不冠の上の穢きとれハ侍ハ掛るハタキ埃掃の指

のりはまをりて掃りんとせしは女妻妾とあけくつめりて後
よりの多ハイナヲとて神と祭りたるものよりあり神とて
地を掃りんとせしは女妻妾揚るゝをりありと辛苦の中
も一節はあり扱四つとより風多も少く穢き水りたきは出
船せんり紙美人共く詰問はるゝ此燈より上り余川を下りて
海也とて向ふの岸は海多ありともは好赤壁とて風波甚き
はハ船繋ぎありと縁とつれり余乃其言を尋ねて連る海の
容子を母とあきり實は美人の言の如く風波ありとつて陰
悪畏るゝ其の状あり此海船美人の千島東沙都伽カムサツカと連り
たるも一節はあり照るゝ燈とてつれり物清きハ体ありは是れ

川の流を不穏に見せしむ此河原に鶴白鳥群居る或物者
 鏡せんとせしに忽ち飛去り又まより小屋の隅り先川と下り
 て初へ来所まで初まるとよ何うしてとも船案らまざる時引
 返りて初りあると美人とのをすしり一掃く漸く言さるは
 船とありきり川の船を乗余も下り海面に出る左りの方ナエラ
 ツトウと云大なる沼あり海面高波お寄り河水激流して船
 漂傷を此所を横切く向ふの岸は急んと流る赤土の陸
 壁して雲せ附りたり海岸よりお寄たる枯木乱れ横く空
 隙あり漸く少く疎なる所へ船とさへ入るは皆一飛りり始
 て安心しきり此切岸は余杖取して数字を題せり

注此崖赤砂交りの土にて甚度くこの洪水は船を流る如くあり
 ようく記しあふとも惜哉き舟とも待たし消矣せんは数字
 とら何を記しあひしらん忍くく日本果も書ひし
 ちよと舟と一舟とぬ

夫より陸壁の上は漸くたししよりき海は此所一面の草系にて松
 の枯木多し其外玫瑰萱竹ハ花盛り四五丁行て溪面を下りたる
 小流は木の横つたたろり鵜とまき里半余りてアイ地名と云所の
 美人小屋は宿也

注此地一面の平地東向して海岸白砂地として歩初むと悪
 一家の傍ら掘山ナイフツのトウキタイは鏡をたらしその名

アイウシナイある紙今アイとのこち通をアイと尋麻の
事ウシと多しナイと沢あり此草後の沢目よ多き故
よ此名あつくと思ひる

夷人各々タシトリと云余今朝ハハと云草の根を入るる
米の粥をら赤小豆の入る粥と食せり此夜後痛しと大
惱めり終宵少しと睡と交るる能はと態後すくは使君
賜ひし正氣散をとり用ひて曉方よサしきやうとあり
昔程大に延引せり

夷家よハ剛もあし坐す那し燃火もあし腹得あし耐
ハ口けし難矣とらるるあり

廿六日今朝ハ晴きより四時より派アイとあし腹得し大
氣力と換し食氣あられいし候きあし草系き或下り
海辺よあし又或三丁してアイベツと云小川と舟して派し或里
程してシルト口^{地名}夷家き朝あし朝飯とあし今日と土間
よ入其あしと暑氣と催ふあし更より小川所よあし又
五里^{地名}候してヲタサン^{地名}ありヲタサンベツ^{地名}船渡しと題して三丁程
あし居村と名ヲマニ子^{人名}の家よ投宿と

注此地も同く東向海岸よりしてヲタサとへつと云川あり其
お岸^{トナキ}柳^{ヤナキ}赤楊^{ハハ}等の山際よ家居きヲタと砂とサン
流はあし候此川筋石砂流はあし候て号字の

注此塊の地形則本文の如くは村を山の根よりありて少く南と受くうに前二道の暗礁有て沼形をなしたり地名に之を岩のうら口と多角の儀あり

夷人の常食コロクニ賦冬 鹹州はあさあへの草の莖を乾貯し置

き水煮りて油換の油と少く入食と塩入食せ及玄米と少く

是に粥とて煮て粥とす油換の油水飴の油と少く入食

を膳掬いあり帆立貝を鹽り此村人家凡十二三軒もあり

けきとも運上屋へ移りあり甲斐文とて煮りてのいんじを皆老

人子供病者のとありまて煮き女美の運上屋へ移りあり

居る女美の懶惰なるもの甚くして夜も忘るるも打師朝

起るも水と煮りてあり物端とて燭子と喫するはあり

ありは穢りあるの女美の男美の信したまひ食草の作り

させぬあり小児の初歩の時より弓矢と持て走りゆくは

能く教へるもや弓張地は附て矢と張るあり人より南を又

子供の月よりして此塊の凡して男子は舌小刀たり小刀の或は

腰に提するに提と提をりや男子女子共十四五才迄は

箭髪子エキシボとて入るもの紙滑りあり

注エキシボといふ形儀を志し此処或三ヶ所のりあり

山嶺渡りの青玉と三斗斗も三角形を系りて本採り

附是と箭髪より玉極美まことの形あり

此島夫はたうし刀とてのり
 きつてはるばるありてのり
 実る舟一にて内地の土人の
 乃つて所なり
 かくしはるのりの子供か
 エキとホとのりともありて
 玉と細りてのりとのり



武郎圖

海防の圖

廿八日朝曇りたれども昏り暗く五の鐘より所と出たり
 山の裾と出り初りエナヲサキ地名シコマナイと越て元寺屋に余を
 てマールヌイ地名と直養の昨々此所にて滞在して余と待り
 至りしゆりて我待兼て今釣出きて今の程にマールヌイ川に
 渡りたるはたふと今かきとてをいさるる遺恨ありしやた
 前路をすくくふ洞宮松岡等の書状と持りて飛脚は今船と
 爰へ着たりと両士ハ一昨夜にウエンコタン迄行きて程ヲロツ
 人所住の地をてはるまんと志ありて余は是よりトツツの
 嶮と探んてめ船吏船とある

注マールヌイは濱形東向たりワアレ岬右シラ、ヲロのエナヲ

サキとの間より一湾をぬき一里所マースイヘツと云あり其
南岬の家居し後ろハ概本を立せ申ふ一ツの沼あり此沼
水の落はまより故は急水のよ一帰路西流ハ越るゆら此川
筋は入るあり川の北岸七丁よりラハコタンと云処有る家
堀君の宮あり一鹿島の社あり夷人等々願ひの削花を
深善中に立るる所 皇國の御威稜を耀との形象と持
こえまきりける

ワレ岬絶壁奇麗ありホウコタンと云所夷小屋ありと云人も
石匠夫より大なる石ありクサレ子グと云夷小屋あり此処を
マースイより海上九三里といふ志あり一休しひ島処のルニハ子人

と云夷人と嚮きこして漢傳ひして約は前ふムシリと云離
鳴ありて臨解居ると駭く五六丁より一ツの岩海中一従人
踏をとりし

注此嚮るの夷人の行処と志ありあるれと志るるチカベロシ
ナイの者ある此地五丁計の素原よりして右らウニユンヘシ
在りるコタンチ岬は對峙して一小湾と稱す其より
島あり後ろは概本を立せ川あり生や岸に家居を地
名をチカツプウニナイの流りある魚一此此鷓鴣カヒメハツ
及らとエトヒリカも知りし集りし生餘さぬの水鳥よの歌
島帯に群れを以て故は此島ありチカツプを名するはして

ウシと多しといふ所あり

夫より岩窟中を初り十間餘まで始りあかしの傍より此
所よりテカリマといふ奇石あり爰よりトツソの山の側面と見ゆ
巔雲は隠れて見えず余トツソの麓より登りていふ所あり
潮満く去路と失りいふと返りて退るといふ余押すす
或ハ潮膝の上まで登り又いふ所あり石窟と潜り一岬と出れば
まこと此の一岬ありて潮くこ捨丁余を経てトツソの麓より海岬
小出より是より後壁より潮水深く一歩も進めかへトツソの
樹木生えりとも高山より麓の方こそ是余の所赤壁より上
余も有海一爰より一條の瀑布ありニライといふ所は是の方

山の裾に海中へさし下る処或は所程あり

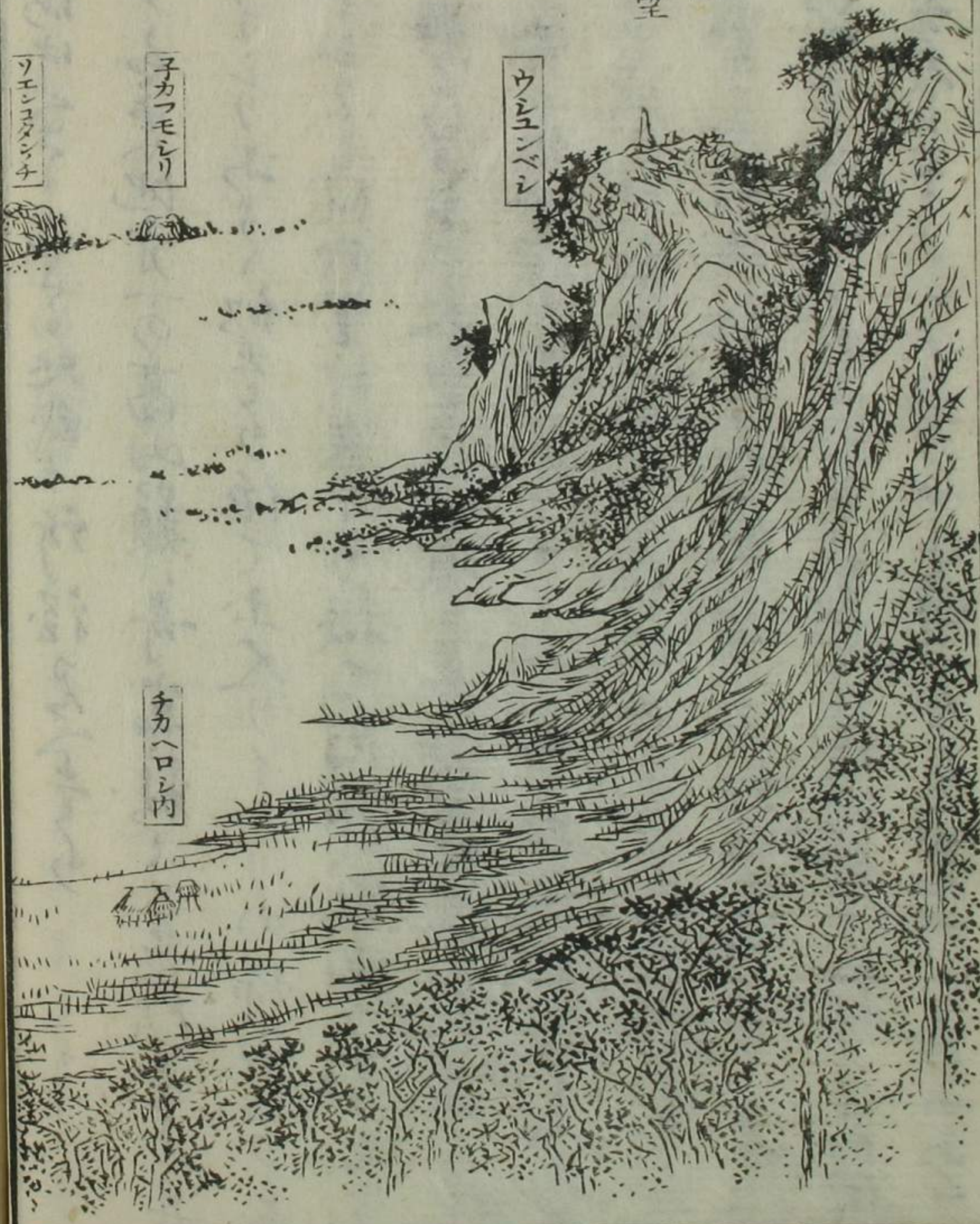
注トツソと東地才一の高山巔の奇巖簇々として立ひまき其
形ちリイニリありく似たり依て土又リイニリの婦山ありと云
まことリイニリも此或里計奥より接て彼壁へ飛去りて
其接し跡といふもの大なる沼に成り山靈著しき所なり往
來の出入必し此麓の字ノホリホと云所の船と云せて削花と
作りて有り初より初り余チカヘロニナイより先の処ハ船にて
通じし所より何處なるや未だ知らざりし其大
岩穴といふ所ハバツテチシといひく穴の形に接して云儀
の岩岬ありしやまことテカリマといふ所は岩岬の形あり

私園

併流藤原

知加邊呂志内

眺望



ウニシム

子カフモシリ

ソエユタシチ

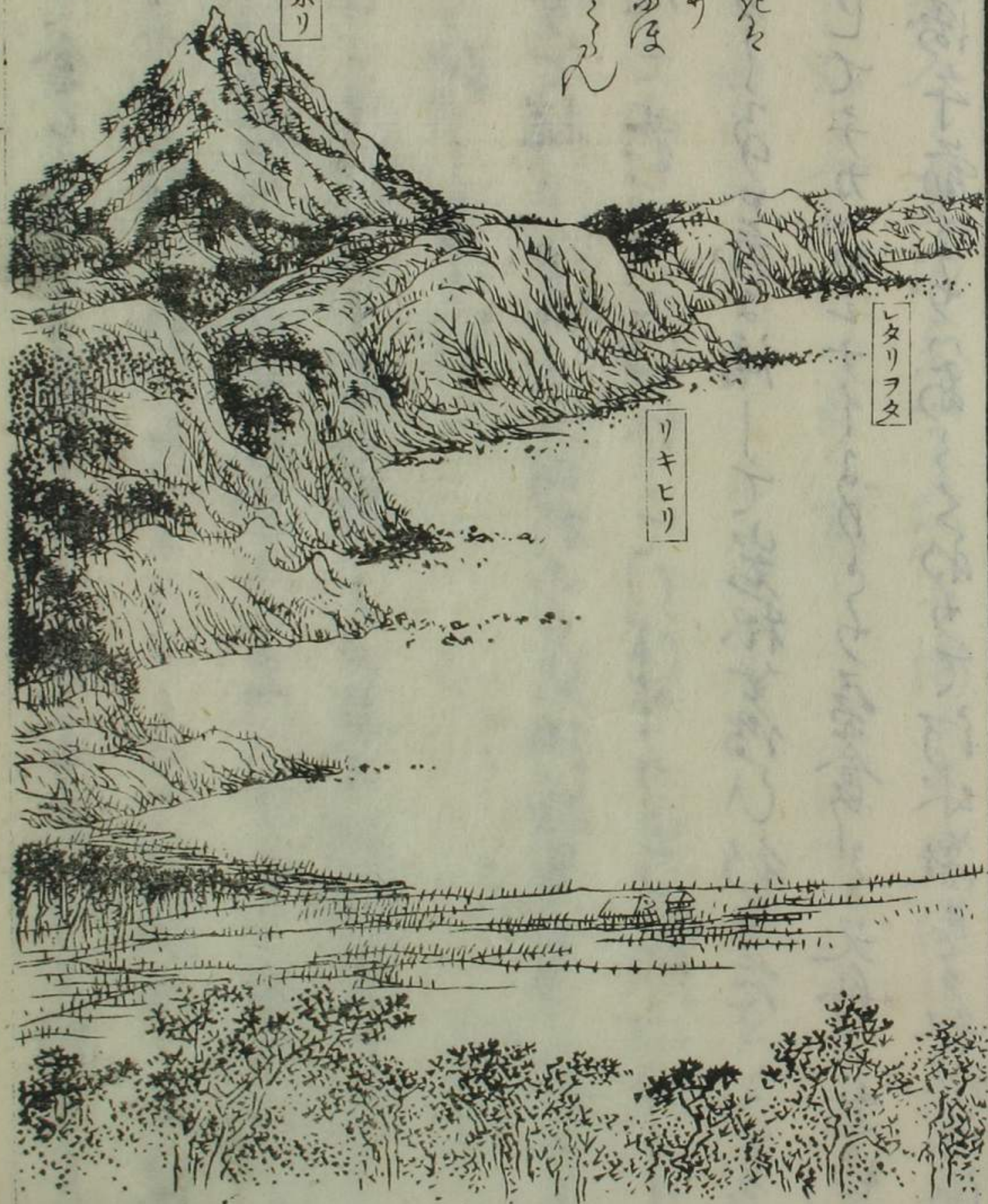
チカヘロシ内

志加の山々
 さらさらと流るる
 こゝろよろろ
 流るるのいさな
 けやうとて

トツソホリ

レタリヲタ

リキヒリ



巨岩より余を船中より眺せしは是より先ハ中へ行く事
 多ハ一月少くも遊々舟中そのトツツと云ハ此処迄行つた
 事ハ此處の山ありふ先生此処まで来りし事ハ奥と探らん
 とせし事ハ少くも不審也若くハ是日記海書ニツキの所
 思ひ得る様ハあり

余猶も山を探らん事ハ同初のもの得路を失つん事ハ
 思ふ所也此を止む事ハ引返さず実ハ潮水漲り来
 りて舟ありしもの事ハ倍して岩根を破り舟は危き事ハ
 あり辛りしてテカベロシナイもの事ハ又舟は危き事
 あり風浪午前よりありありと波打て河水激しく船漂漾

去り潮を打入りて波ありて舟中より海
 小浪ありし故に船頭の夷人高き声ありて
 呼りけし事ハ吉事ハ聞かせし書附直り

- ツカヘルシナエ 地名 トマリヲロ 湖 カムイ 神 ヲロロリ 様の方より トシヨフフノカムイ 山の神
- マトマイカムイ 松前殿様 ウ子ノカモイ 同一王の神様 子タシユ 有故 ウ子カムイ 見て居る エンカラツキ ラムラ
- ツケノ ヤウ ヲマナシカ ヤウ トカンナカムイ これの神様 ヲラロワ その上 子ヤカシニケタ ヤウ エンカラ 神様見て居る
- ラムラツケノ 達者 ホツケタラマ 暖日時節 マナニ 向へ ツキ 著る ヒリカ ヤウ シリンヤツテ 在天気 アフト 雨
- イシヤマノ その シリ子クシユ 天気 アシン 新 ノカムイセ 神様 エンホロリ 悪い ツキヒリカノ 老人

譯未と云ふ事ありと思はる

七の時前よりマールヌイより戻り今日より近き所迄行つた事ハ情事

急に余程暑氣を催せりされとも綿入の朋^{トウキ}若^{ハンテシ}律^{カツ}切^ハ合^ハ羽^ハ杯^ハ重^ハの
て日向と歩初たきとも汗もあはせし異候志る趣

廿九日朝晴とらマーヌイ川を船にて沿り初まは市捨四五間と有
屋一西岸櫃の木林とて水至て清冷あり尤右の属也凡武里奈
りてチベア^{二地}と云^名起りて今^日も亦山路へ分け入るれハ例のアツシ
と恙あり乃路傍の木

是處^山の^名は^何れ^も知^れず^も衣^袖せ^をみ^合り^和集^りて^守ぬ^志ぬ^も群

汪此所船を圖へ引上置是より漢路に趣るはあり依てあの處

あこのチツプヤンゲあるへ」と聞たりなる

や、山路もわきまあり此所とエニエヤも方^{ラト}らぬ難きとされとも兼

て使君の通行有へきゆあるれハ直養夫人も命して草を蒔かせ
おとせし故通行きて那やとて又故も少し山を上り又流し
下りて支^ニ度^ノしてやとて山を起りて処を休む此辺ケヨミ^{二地}ウ^名
と云^也は使君の爲に飯小座を掛せりゆあるれと余知るなりは
寄て身合りき是よりまた臺^聖宇^律程して夫人等武人來る
小座不言語不通空を別進去る將して豊吉跡よりありと
彼武人の西北迴浦の方より東地へ白米を炊せりあり依てその内
五粒余分ておをりると同初今宵より白米を食してとして喜
ふ又足跡より来るもの左鱒の尻あまりのをまき尾捨ひぬわは
と瀬のゑて此のこ食りて捨るありと凡瀬に魚の尻のこ食

去る余ら拾遺より魚と煮るこゝ不儀と也則肉を割て焚火して
 炙るに醬を以て余炙るを女の難味等と評て食し其味甚
 と後此穀は海辺に宿したまはる魚不足して今夜は昨夜
 漸く一腐と嘆きされども鮮魚ありけり今日も石園も瀬
 のふふ美味と嘗めり又昨夜未だして釀しる白酒と持
 来りて船の上の場として美人も亦寄りてサーブニ
 余ら酒酌して列に加はるり酒も茶籠に入り持来りサーブ
 二と一連は五六杯と傾て心地宜氣あり余少く嘗て飲るる不
 醒の膏より酒やくり少く甘味ありと酸きりり甚く下り
 小高き処を以て越えり元武里余と忽ち交り直養の宿し
 きる小舟掛より入りて一宿せり

注按とらに此処元カアマナイといふるやみちへ一水宜なる
 船上人号昔より山越への中へ必止宿する処なりと
 晦日朝曇りたり去る余して大木の倒置る所は体玉此木
 美人も本幣と立てゑる又鉄の矢の根影しく刺りて是は
 子トカン又しともいふ
 注此樹數圍の方本形ありて武二千年前倒置るとも此辺の
 の土人弓勢と試んて先よ此木の梢に向て射ちる其的とあり
 肉もさりとち生涯なるある獲物と云ふも射換るるに似しと
 云他へも立願し皆試みても今も鉄矢を刺りて子トカン

射りカンヌシとらあり刺さる澤のよーなり同名トンナイ
チヤ城ともありやういワールレのサー北シマリよる子モロ城等
を餘所くあありなり

此前後分水嶺あり夫より武里余躋攀してクニユンナイの川上
字チベアケといふあり出きり此処より上川^{ウエカハ}部^部より分間せ抗あり余此
所より樹を削りて

東涯探遍又西涯短褐孤筇涉嶮奇嘗盡瘴嵐多少苦便

知我亦一男兒

此所より船式艘と稱したり是を直養と命しておせ置るなり也
是より葉船と云ふ人多くし船底やこすれハ沙は播りて

傾くこと危くありき艘の船より荷物人夫とも葉船して六人
漕船したるよりまより厚板板を多くし之を余とりてクニ
ユンナイより書と

輕風一路掉漁船六月荒陬未脱綿兩岫幽禽弄嬌舌韶華

長駐九春川

此所夷家四五軒あれども人家ハき軒のよう一處は仮小屋を建
たり此番人を馬吉と云上川より従ひて築地^地ホロコタン^地名^名まで行
き長吾川就作を連く道ゆりたりありさうてクニユンナイ
川落口を三捨間もありライチ^地シカ^名の川落口を是より三倍すと
馬吉の物語なり

注此所西海岬平地一條の川あり先生舟とてりしは流也
 又家ハ川の南岸あり此処吾らウスのカハハなるエンルカ
 タクタクヘウシの岬對峙し一小灣とるは朝波浪穂に
 故に此名ありクニエンと浪無と云候なり

夫より傳傳ひ武里余よりナヨロは善なり由所乙名トクランケ
 人の家より泊り此トクランケと揚忠貞といふ者の曾孫あり
 といふ今日ハ直養の御意にて家より居るは其妻たつへハ大綱

鯨の切肉を入水にて煮て妻人共は振舞振子なり燈の端より
 サアブ二人ケトウシ人トメカアイノ人坐せり又此家より居る白髮の老
 人同く坐したリトクランケ又あるの各海扇と本より傳りて是

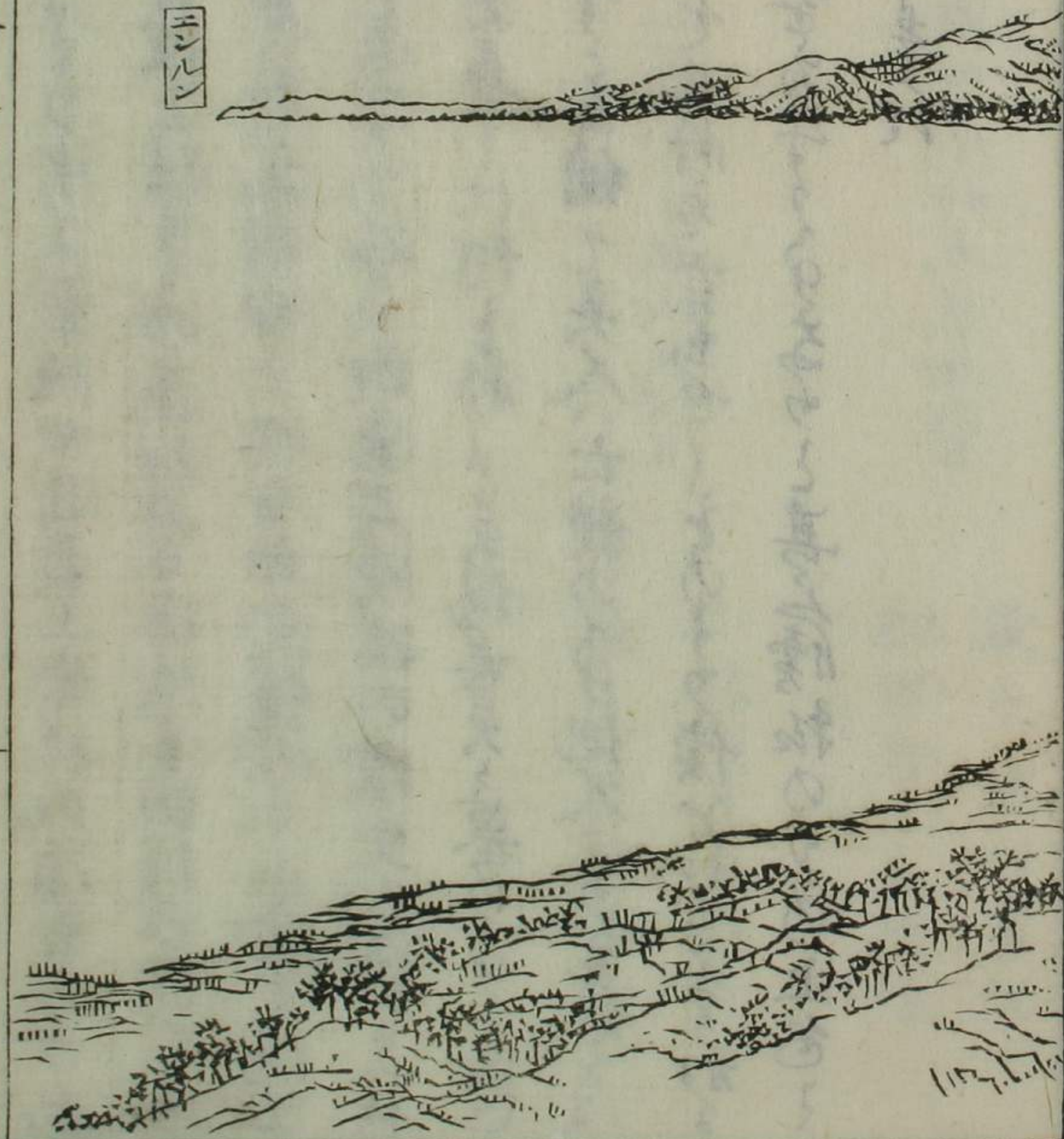
く塗る物も切身と盛て食と各一椀の食一終りて指して是
 を拭ひしより毒或は袖にてふみあるとて妻人返せり

注此島の風とて出入りとも和入りとも客行の舟ハ何品と云
 りのれと直に端にて若く振舞と例より五部有る村ハ善なり
 五部より一種の食物を持来り御食せりは食器ハ多分帆立貝
 ちりちりありて小判形より彫りみち持廻り耳と指し拍子
 是を子マといふなりそれにて食し事ありて必と本文の如く
 ちりちり神とて拭ひ返り洗つていふ事と云候

妻いそ傳り洗ひもせしめて箱中より入りて善器の此トクランケ
 来り余揚忠貞の物なり是れ一見物に度中を善と以て言はまは

久春内
 眺望
 私園
 久春内
 眺望
 私園
 久春内
 眺望
 私園
 久春内
 眺望
 私園

二八



私園
 久春内
 眺望

〇七



孟弟拓の物を出しし中より其附四通最上常短の潘書ありし是
要分界、載るる管理之姓云々の花押有唐紙半切程の滿文の
始より押より端の方ハ印文消滅、次に印文續へり、又常ハ滿字
より少くも續ねるものあり外より或通尺續拓の漢文と滿字一を
有此外宝物やあると尋しに何と物と云揚忠久の墓のりり、
よ今と朽と志述すと云總て夷人ハ亡親のりり他入より言わきは
大に愁傷するものとして其附と云あせり、とのより債とわとるなり
通辭とるものなり、其を過すものありと其ハ續拓のもの上色り
たの姓名成志と云し記

寛政四年壬午五月廿六日

最上徳内常短

和田兵太夫典恒

文化五年戊辰六月廿日

小林源之助豊章

最上徳内常短

奉

旨賞赫哲來之佐領付勤理等抵至徳撈賞烏林
查得各處各姓哈賚達俱赴前來領賞惟陶姓哈
賚達近年以來總未抵來領賞每年憑以滿文劄
付領取似此情形寔非辦公之道耳聞西數大國

與陶姓人往來是面是以煩勞

貴官如遇陶姓人切爾曉諭令伊明年六月中旬
前來領賞如不抵至即將此姓人銷除永不恩賞
故此特懇

佐領付勒琿

賞烏材官

雲騎尉凌善

防禦德僧尼

嘉慶廿三年夷則月十五

耳聞

兩散大國原因並未知情吾未

大清大國恩賞烏林亦來者各官負以直驗者不
負自國故此賴一日來若有順使者此處原由一
竝分別預來覲直須知寔荷

大清大國官負

拜純



此は通本書からあつたものなり
 此書は通本書からあつたものなり
 此書は通本書からあつたものなり

清用

此書は通本書からあつたものなり
 此書は通本書からあつたものなり
 此書は通本書からあつたものなり

カラフト島

ナヨロ佐吏

ヤエンコロアイノ

此書は通本書からあつたものなり

注此処南成向流形一々廻て海岸崩岸多し一々地一條
の川ありて其兩岸は人家十余軒家居はナイヲロと決たき
一々の川あり

七月朔日朝晴きなりトクラン人^名の家と前川の川と小舟にて
流て流廻りあり是より七里程赤土の切岸にて潮播き
来る所あり風波より通行して難極のよう一々よりしてヒ、ハツ
川と越ニラヲロよある此処夷小舟あり体も是より此所の土人
サンケアイノと名あり一々拾河程にてカウマナイサニヤと拾河も
るそマヲナイ拾四丁とありトマリヲロ此処川口中部中間程打
開きたる所あり夷家あり一々是より七里余も行く奇巖多し此

よ到る此處海中水約多し一々怪石あり此処海中二島出
た大岩ありて路通せと山へ上り又直下りたり是より拾
飽一條と拾穀あり

注此島を威基基と名ふは拾飽に有る一々とあり此島にて
多し一々拾て島夷甚も彼水獣皮にて製せし物と履く物と
此皆夷製物とあり拾飽の用心とあり又
拾飽と拾穀あり和人の信一々又穀と拾て天氣悪し海荒る
よ一々の川あり

夫よりヲテツコロの間凡七里余も有る一々奇ある瀑布あり其
水噴よりありて微塵より碎けて霧とあり瀑布の形とあり

又流水巖に海の苔のさりと作りし水柱の如くありたる教條も
 落ありヲテツコロといふ小川と海とを所として從ひ來るサアブ
 二人と女の子の後まゝに運ぶをりて此処より海岸浪打際とた
 とり絶壁と作りし潮のさりとて遂に八分身濡るゝあり大轉
 ち右溪と暫し或く巖石其身へ通路絶る所より此処とツウカイ
 といふも此海中の岩は海猿一匹横りり即ちとて想を統せし
 小中りたる指子あるれども此を海の中へ轉ひ落て行方知れど
 危角する内日を暮かて雨を降出さるるより絶壁と作り
 せらふその上泥濘深く草の丈高くして墮急と言ふ處とも
 あらと彫り山上に記をり又決り下り岩水と絶りたる又向ふ

大なる山あり難事なれども往きぬ草根に取附杖を助り
 遠處より黒霧中と初深草の内樹木の横りり所々遠く隙へ
 びくも方角とみせるとは通るとサシケアイル人^名と猶先こはをみ
 手槍とまゝのゆゑに建置を度りあはれ能くすゝみと油燈を撥
 かけすゝ初め此の數度とて漸く下り坂もゆるたる所窮め
 て難所として泥濘深くを歩くと失すれい忽ち深谷に流る處ま
 指もあり余度として疲憊極まり進道も窮し漸くを告ぐと夫
 人等不引通して若くはととゆ^{スガ}り障りぬ幸にして夜三更の途も
 有通し海にわたり流るる身を懸とけ須臾息をたすまふ
 堂式丁歩りて飯を食ふなり

注此所云くくらホントマリを指す此道者よ女の子并に
セカチ カナチ等道も通約いさう一は船中なるありナヨロ
より元八里半計と思ひる志うは夏の道よりしてあはれを指し
也此雜漢をいあはれ何うよ不審たりむもツウカイの
漢の轉音石とて難おるれども定めて也此固うあはれよの
よりしてトツソの嶮とやうも奥深く探らんとの心をせし何
なみいひいやい此能彼をよはさる計の二かう一の難前と
もあはれやい

此被新しれ作りくろ小登して建屋の役とて人の居は何と
か一唯火を焚くくろ跡のくろわは皆く華はお遣くくろ

くろ人とは穢穢と此道能美君住き人のれ一是よんはバイナラ
サムシ地名と云所して美佐もあれども四里半もあはれくろわは跡を
た遣て今宵は只此のくろて夜とめ及へくろあはれくろ荷を預
くる美人とも跡よりあはれくろあはれくろ思へくろ漢也くろ火を焚て
とろふ並能せくろ湯と沸くくろ思もあはれくろ曲とのくろ水と取
入くろ吾も余ら茶碗の水と入焚火くろ寄をせられくろ人沸くろ
是は砂糖のすくろ貯くる紙入くろ吾もくろ唯目くろの端末と一袋焚く
きくろの極夷くろ多きくろたはくろ是のれくろ雨を流すくろはくろ極
根滴り路よりくろ濡るくろはくろ壁くろあはれくろ窓をぬりてお被あぬ
此りくろ余はくろ水巻物を僕仕用を告サンケアイ人のくろはて

其餘ハ皆暖まりし日終日の病れしや皆々延と被りてお妙なり
 と余と戦ふの能くして火より南りて濡る衣成乾し又と妙と
 暖まり皆々と暖めたりはサンケアイノ人ら妙と横なる事と
 ちくき人火と守り居たり夜半なるはより余勝と傳へ草延
 と被りたるまうお妙ぬ

二日昨夜より雨降續ききり余夜酌の以目覚めて又火より伝き
 たりサンケアイノ人ら支度して繕を推しお妙なり是より明後
 是より人豆の運びは初くとお妙なり其精悍感とて一まより一睡
 あり朝より目覚めて起りたる雨まだ強く降きり危角する内
 後是より人豆女の子とも遊びお妙なりたより吉まより漸と暮る

皆々食より明日午飯の傳われは品とん其美ありし一夫より
 爰と出て濱也と九ヶ里も来りしは向方の方より帆成りといえ
 たり余二使君の船より一と思へる間船き人もの一稍延
 つまらざるは又武里余も居りしあり海面終四五丁余も隔
 り所より停望せしは被船よりも此方を見る指子あり余も何
 とお妙と趣たりお妙なり命して空砲を發せし須臾
 あり被船よりも是砲と答へらしてよりよりして使君の船より
 と思ひきりし途申揚せしは必よかきものよ由人引返さんと踏
 踏せしは帆と掛て走る船の川遊着しは目的もふし危角
 思ひ願ひしは又武里余も来りしは表人き人出迎しより此の

カモイトノチツフありやと問ふに願ウチつきたり夫より小川に渡り
大船 船
ハイカシカシは著きり

注記云く此所ハイカラサムシかと問ふる本名はハイカルサン
夫を流りてつちも船番舟一棟あり其傍は小川あり後ら
崎くする岩壁地名ハイカルは春のうサンは流道下ると
いふ儀此川春雪融すは流るるなり此名起りしと
思ふ

船隻只極美船は荷物と積余より是は此所より舟より居たり余は
云わしハ船ハ昨夜ノ夕ニヤム泊りして今朝帆しありしと問
て先の船の空跡を得る直養ハ昨夜ノ夕ニヤムは泊りたるは
舟は面湯して事情とて端たる舟は余は僅は五六里の遠
より夕ニヤム地名はさうはりし遠懐のつはりなり余は舟は
河平の舟氏河津 平山一書と出せり是は其の事情ハ直養湯したる
と舟人の唯実岬の候と探りしなり此述を舟は爰と出て石
濱と半里程あり夕ニヤムは著

注記此地向小石濱五六丁も続きたり右はアサウシマキ岬
たり右ホロヒラのサキ岬とてお對しと船舟ハ其間一小灣を
かして遙南よりトロの崎とて一條の川ありて此小岸より
番屋一棟賣家五六軒とて一處ハ漁場たり本名はウ
タサンたり紙束地は同色ありと記しつとれくノ夕サンと記す

唐大日記 卷之十一 七十四

更りしと云ふ

昨日より使君の泊る所ありて村垣後君らエンルモ
コマツと引返され其地はよき所なりと知れり其後通船
家と留りて其川是なりと云ふ其船は先づ先づ
よき所あり余クニエンコタンと出てより十四日湯ありてこれを
是と喜ひ連日流る地は狭く舟臥きり此夜風の吹
雷鳴あり

同三日朝雨を以てり歌きり今日極寒なり其て物も風
強けしと海上穏あり武里余より小川ありトウブツと
云ふより上流して明番居りて小憩す

注此所西向流りて元山極本之川あり此より注あり地名ト
ウブツと注の落口と云ふあり地名此処の川より云ふ起る
船より更りて乗船し其出る殊と傳ひて同所ト口と云ふ
凡武里余より出るより又此岬と云ふて武里よりトコタン
より著此岬小山と後よりして湾と云ふ所 後より小山あり
沼あり鮭場所のよりして番屋も六間と拾得程あり毎天の
社あり其家も十軒程あり也總て此辺の冬は宜き所なり
あり雷も五六尺位より深く降る事あり

注此所流形申商向東流あり方ノト岬ありエンルモコマ
ツの岬對して突出り其間モコマツ近一大湾あり其

吾氣を以て
画

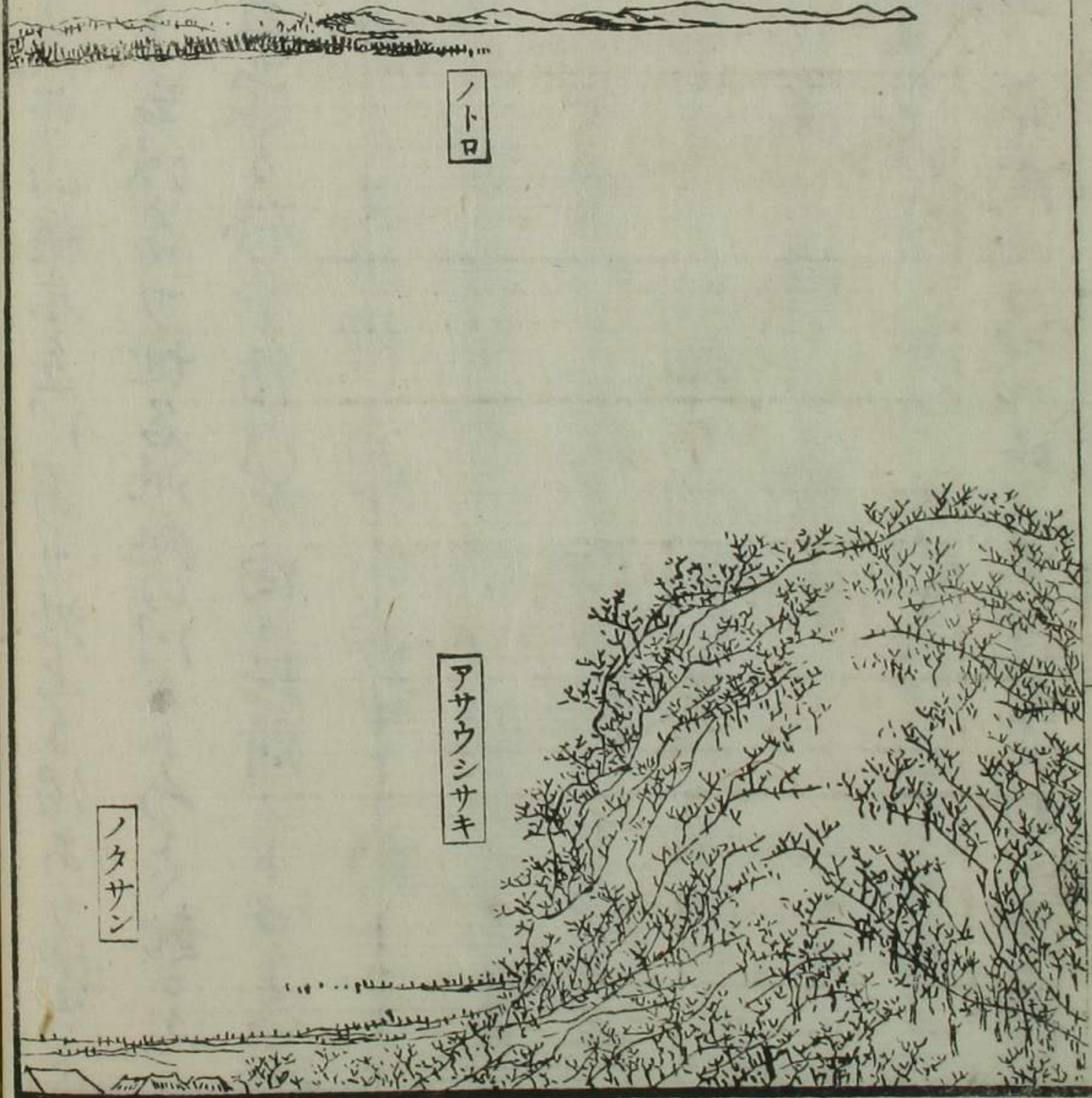
ノタシヤム
の眺望

ツツケ

ノトロ

アサウシサキ

ノタサン

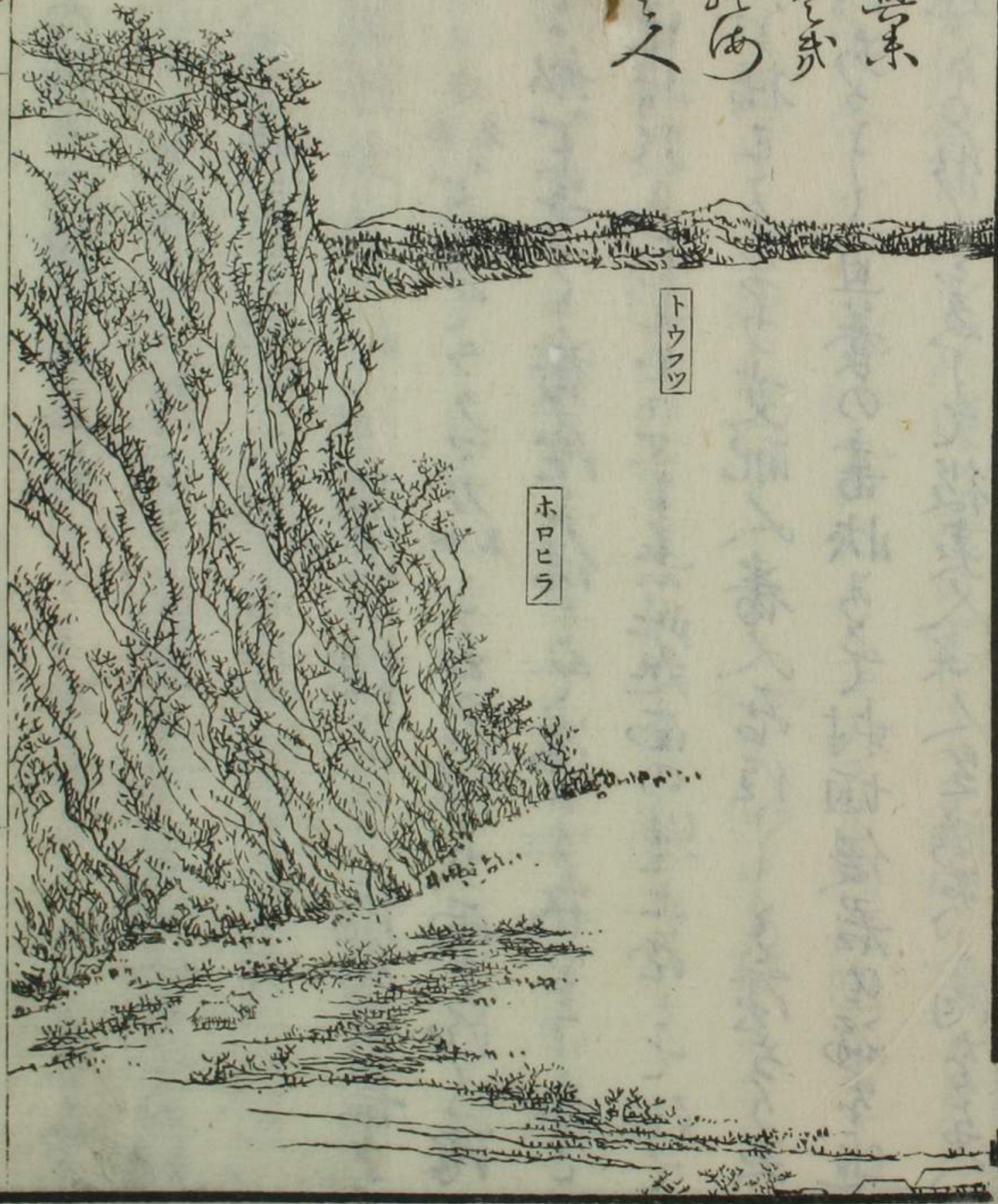


吾以遊探無事
策舟心貴そ哉
幸能の美経西
波濤臨眺之人
写し紙紙

畫師

トウフツ

ホロヒラ



番屋の後ろ沼あり傍て此名起りし本名トウコタンあり
トウと沼コタンと起りし傍あり其上に橋スリバチを依りて
山あり土人等是をまたリイシリの妻山ありと云

四日朝より雨降出されども海は穏なり床潭の前より

乗船してトマリホ地名と過てラクマカ地名より海より雨降り

高きは此所は船を寄りて番屋の体にて濡るる夜と云ふ

と云ふより八時半時迄はエンルモコマと云ふ此処西の運上を以て

西浦の漁業と括するなり支配人番人吾任し其處より夷

家も三千八百ありし直養の書状ありて村垣使君の跡を

シラヌ地名に赴きし船ありて後夷人并人皇親夷人酒を以て

て此り迄の勞致慰めし此運上を以て高山の頂を見家

番人は尋るに夷人トウキタイ地名と云ふ又メノ子山と云ふ此山と云ふ

家より山と云ふ洋中より望めばリイシリ地名と云ふ似しるがメノ子の

稱ありと昨日床潭の後ろの方より云ふ山あり

注此所南成より向ひトロコ射一たみしこの岬あり是を以て

号ししエンルレと岬のまゝなりコマフと云ふ似しるが

是の岬ありし岬に大船を繋ぐ後ろの方ラカイノホリ

山名ホロノホリと云ふ高山あり此間より南流ルウタカの河より

越るより海に運上を為し合て武拾余株夷家三拾六軒

毎天社ありと美しむ建をりし

五日 今日の朝より晴なり

注此島濠濤深きところ四季の風ありて魚りて晴ると
十日より一日もあまの雨きこの地をあらう此モコマフ二里前
後の処に至りて濤高しよる考ふふ教て今日晴るといふ
よもなきへ一此辺よりトコタンヤての番屋敷す所あり人烟
を疎ありこれ依て志くくむかふなり

是より乗船してヒロチ地名ヲホトマリ地名ありと近く何處も山の
裾にて夷家なれどもお閑きたる処いんふとタナントマリ地名と云
所より上陸しそと昼飯をとりて番屋敷にて所見を賦しきり

處々黄第倚翠微草深古徑没柴扉枕灣沙岬衝波瘦繞舎

溪流經雨肥窗小唯看山半截江平相映鳥雙飛漁村靜

閑無事一縷炊煙人未歸

注此地溪形西向小石魚うく後ろの方平山極本之モコマ
フより六里半陸行の止宿所よりあり処より番屋漢小屋
等あり夷家むういあり今モコマフより引取てき船も不任
夫より又舟より乗りて七の崎前トコンホより着て此処を番屋
も手廣あり

注此所西向素溪在りウエンヒラと云山の岬右ヲタライチ
地名と云一條の砂岬對峙して一小灣を形川あり其南
岸番屋一棟板くく舟より夷家を新あり申の方十重里

ト、シマと眺之風景いふん方如く

六日昨夜半により雨降出、曉のほより晴く、前夜より乗
船と海上数十里ふト、シマ城名地ウニニコロ名地ナエホ名地マツナ
シ名地とてハハ時迄モイレトマリ名地は善と今日陸過せし所も
昨の踏の如く皆山の裾のまゝ平地少しモイレトマリ名地と
少し打聞きたる処あり此番居して帆立貝と焼の血を用ひた
る風俗ありとのなり

注此処本文の如く山の裾がし打聞、処は番居あり余も
あま止宿と後形西向し、ト、シマと對し、この此島は
全海嶺多きより此名あり、こを周囲七里より此処海と

七里有とや又南所の地名モイレとを休トマリと船瀬と云
像ありトコンホより七里餘あり

七日終日雨今朝の荷物と船積りして余と陸行しきり
ありモイレトマリよりシヨウニ名地まで凡拾里余の万夷家
を新もあし中あらし山を遠く打聞きたる処も河邊と小島
掛もあし小川新くありて何處も皆好むところあり何と
いふ処も小憩し、雨も強く降、食食はすき所も
あり、後てはあし、て起行せりシヤウニ名地の少し手前、海岬よ
從舟へて遠見とれ、屋根の中うなる岩あり是をウエニ名地と
いふエニと息まのチエニと注のあり、此岩は、岩出て

海少し霧多し日ら船を入らるりありあはるる船は此種ありし此處の
裾凹たる所を越て七つ時色しヨウニ地名と云ふ

注流航西向下ら小石あり後方の方峨たる高山極あり地
たうヤエンシホ地名右ウエンチシ地名并ひ突出し其間或里針

の間一小湾と称し又未の方よりイシリ地名レブンシリ地名を
見風系いん方あり止宿所一棟并に妻家二軒あり七工

レトマリより九十里あり

八日朝より小雨今日も濛然をシヨウニ地名と出で直に屏風あり
ゆるゆる絶壁あり海岸ありおて道邊をさし陸の方切

岸と攀よりて度き系と四五丁ありてゆるゆる海岸あり是

より小川を四り越て又絶壁の裾をりとおりてアカラカ地名と云

高山の裾と云ふ此処大絶壁に極美松の磯列を解し魚りたる
さゆ奇系いん方ありまより大勢を流すと云て大なる瀑布

式ありあり唐舎也浦中より始て入るる大淵あり巾几之間
も有る一々所ハ少く扱れども式原に居るり実より奇観

と云ふ處し此処とおして岩の少くおて屋のわくふありたる
下は小憩し此石階は燕の巢あり夷人探りて燕の雛を

得るり美りたる羽毛も見せられいよこせとの処へ入させきり
まよりうまをわけてまに半余りてシラヌシ地名と云ふ村垣後若

直養号にんくは月の辛若と語り合て皆く恙た記をかきし

レラヌシ

弁天社より

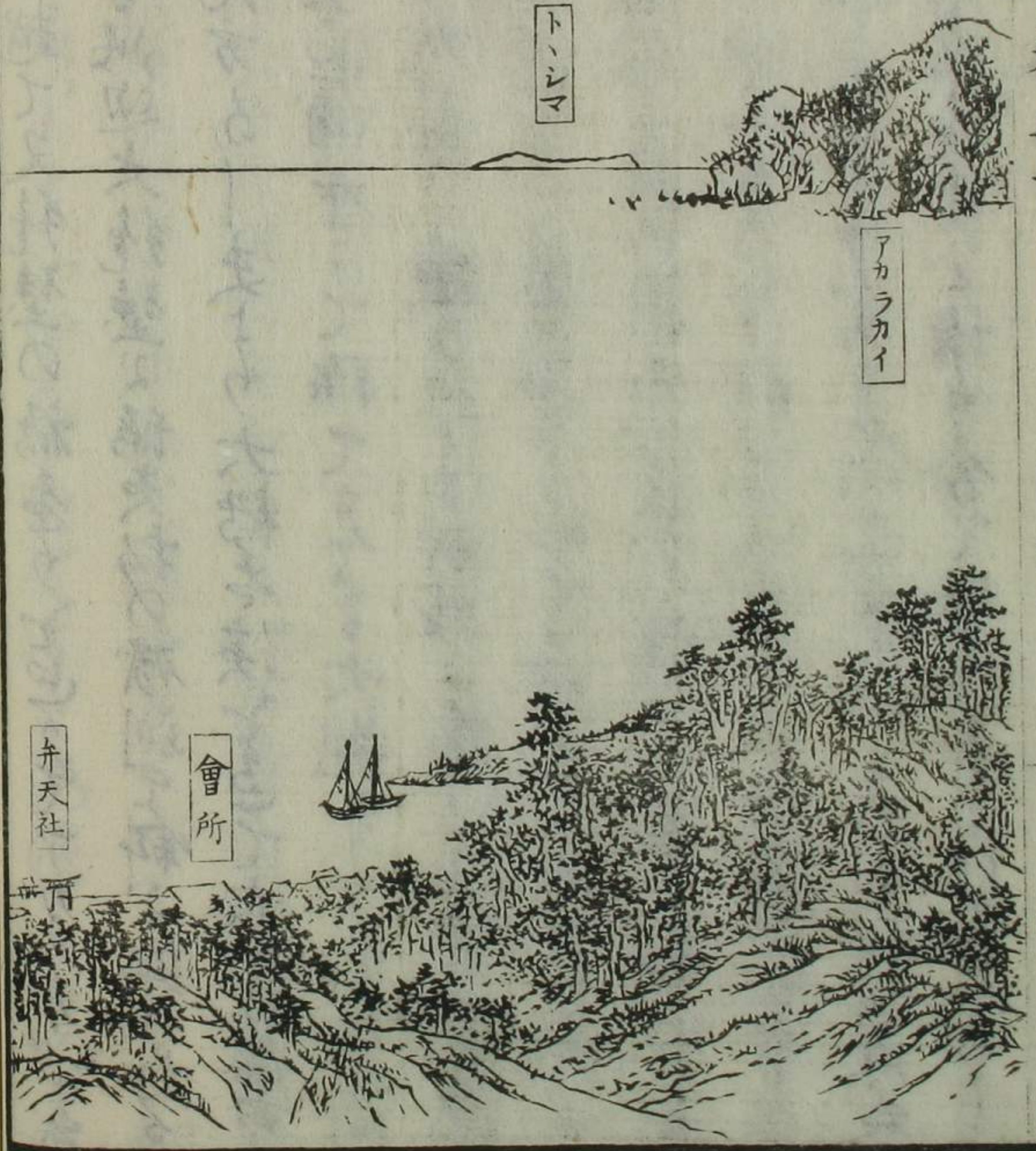
眺望

ト、シマ

アカラカイ

會所

弁天社



水鏡月中の九月初夕のころ

あしゆりの玉女の御衣の影を

御衣の影を御衣の影を

はくねりてまよふ御衣の影を

はくねりてまよふ御衣の影を

はくねりてまよふ御衣の影を

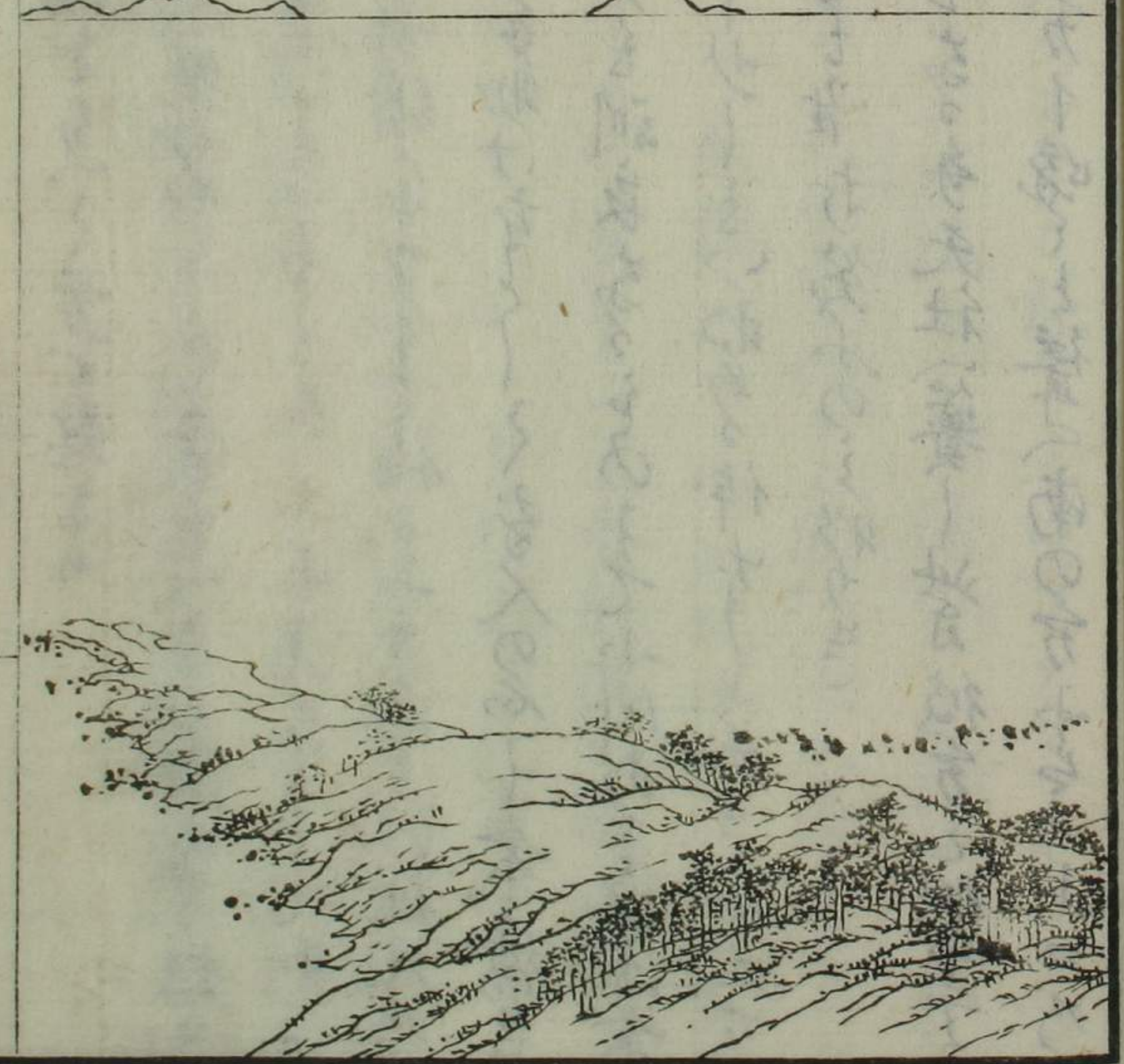
はくねりてまよふ御衣の影を

レフシトリ

リイシトリ

臨川と竹也さるん志のゆかり
きみかきぬ御衣の影を
ゆかりの影を御衣の影を
志のゆかりの影を御衣の影を

ソウヤ



百連一人は船乗りも酒を飲むく芳を魅せり

とくく夫人ら悪直小児の如くして愛を乞ふまことのあり程の
の同好も少くも物争ひするまもあし長老ありとて別よ
る敬する体もあく少福ありとて侮るふもあはれ他人の
家へのても食用のを助けたりとく夫人の如く余の郷を
したるサーフニアイノも訓良あるものにて小川ありとて余
と負ふく渡り出さし少くもいねある体なりと若くは夫人の
の戯も強く成りては唯お笑ふのまなりき

評去歲夏余シラヌシある毎天社へ簀し此方彼方と眺望する
お水の方よりアカラカイ峰と從軍へ南の方よりノト口乃

岬海中へ突出し一抹の雲と鏡つるまの方よりリイシリレ
フンシリ海の中央より青波揺るまの後ろの刃雜樹陰森た
る中より獅子向きとありて何と何と問ひ夫人等カリンハ三
のイフイケと蒼くあり是櫻花より此花五六月の以今
と盛りと開くありとて先生の區春許潭の弁天社に
さけのひりかうらたと思ひか一日記のまに書附し
今志のぬのの圖を繋ぎ併せてよみ志すも
此巻の壑尾と水とのあり

一枝紅艷弄嬌柔六月初旬香正稠夷虜何須詢國境此

卷開處是 皇州

松浦竹四郎評注

安政七庚申年正月發兌

江戸書物問屋

日本橋通北十軒店

播磨屋勝五郎藏版

